

助産学の学習初期における効果的教育方法に関する研究

—— 分娩見学自主実習の効果と課題 ——

横手直美・竹田まゆ美・楠 広子・井上雅美・吉永茂美

【研究報告】

助産学の学習初期における効果的教育方法に関する研究

—— 分娩見学自主実習の効果と課題 ——

横手直美, 竹田まゆ美, 楠広子, 井上雅美, 吉永茂美*

【要旨】

助産学の学習初期に自主的に分娩見学を行うことによって学習のレディネスとモチベーションを高め、助産実習（とくに分娩介助実習）のスムーズな導入を図るために、助産師教育課程1期生に「分娩見学自主実習」を実施した。見学実習の効果と今後の課題を学生の視点から明らかにするために、無記名式質問紙調査を実施した。

その結果、講義や演習では、講義内容の理解や演習のイメージが促進されたことにより、役に立ったという認識が多かったが、助産実習Ⅰ・Ⅱ（分娩介助実習）では見学した施設と実際の実習施設が異なったことから、役に立ったという認識は少なかった。また、多くの学生が見学内容や自己の気づき・学びをレポート記述することに学習効果を認識していたが、見学後の面談は日程調整が難しかったこともあり評価が分かれた。

以上から、講義・演習に関する見学実習の目的はほぼ達せられたが、助産実習のスムーズな導入に関して学生自身による学習効果の認識は低く、見学実習の事前準備や面談の設定など方法上の課題が残された。

【キーワード】 分娩, 助産学生, 見学実習

I. 緒言

近年、広島県及び近隣地域においては助産師の不足率が高く、産科医療体制の確保のためには優れた知識と技術を有する助産師の養成が喫緊の課題となっている。こうした医療機関における助産師養成ニーズに応えるため、本学は平成21年4月より選択履修制の助産師教育課程を設置した。同時に、看護系大学の既卒者（注：卒業見込みでも受験できる）でさらに助産師国家試験受験資格の取得をしようとする人へ助産師教育を実施するために、わが国で初めて4年次編入学制度が設けられた。

助産師教育課程の第1期生である8名は、本学を3月に卒業し看護師および保健師資格は有するが臨床経験を持たない者、看護師として産科以外の臨床経験がある者、看護師として産科ないしNICU勤務経験がある者など、多様な学習背景を有しているため、学内の講義や演習においても学生の臨床経験や学習背景を考慮した学習初期の支援がとくに必要と考えた。

また助産師教育のなかでは、助産実習として分娩

介助実習に関する比重は肉体的にも精神的にも重く、どのように実習に向けて準備を整え、どのような方法で実習を展開することが最良であるのか、各教育機関は常に試行錯誤しているのが現状である（樽原, 羽根田, 山崎, 2007; 岩崎他, 2008; 三浦他, 2008）。なかでも直接分娩介助1例目の学生の緊張・不安は生理的反応からみても非常に高く、ストレス感情の中でも「脅威」が高い（村山, 渡邊, 2002）。過度の緊張や不安は知識や技術の混乱を招き、本来の能力が発揮されず、学生が失敗感を感じ自己効力感を低下させる要因となりうる。たとえ産科での臨床経験者であっても、助産学においては初学者であり、助産師としての視座を持ち、学習に臨む必要がある。以上から、筆者らはすべての学生に分娩介助実習初期の過度の緊張や不安を軽減できるような準備も兼ねて、助産学生として分娩という場を新たに捉えなおすために、学習初期から分娩見学を行うとよいと考えた。

しかし、他の助産師教育機関においては、学生は助産実習に入ってから最初に1例を分娩見学した後

* 日本赤十字広島看護大学 看護学部 yokote@jrchn.ac.jp

に、分娩介助を開始する場合がほとんどであり、助産学の学習初期に先行して分娩見学を行ったという報告は見受けられない。そこで、本学の助産師教育課程では、助産学の学習初期に自主的に分娩見学を行うことによって学習のレディネスとモチベーションを高め、8月から始まる「助産実習Ⅰ・Ⅱ」、いわゆる分娩介助実習のスムーズな導入を図るために、「分娩見学自主実習」（以下、見学実習とする）を実施した。ここでいう「自主的」とは、見学実習が本課程の授業科目ではなく学生自らが希望して行うこと、実習施設の決定から施設の看護責任者への目的説明や日程調整を学生自らが行うこと、教員は同行せず学生が1人（または2人）で見学実習を行うことを意味している。

本研究の目的は、この見学実習の効果と今後の課題を学生の視点から明らかにし、見学実習における、より効果的な教育方法を検討することである。

Ⅱ. 分娩見学自主実習の概要

1. 関連科目と見学実習の時期

見学実習の実施時期については図1を参照されたい。「周産期母子ケア論Ⅱ」は助産診断に必要な知識と助産過程の展開を教授し、講義と演習で構成される。「周産期母子ケア論Ⅲ」は分娩介助を含む妊娠・分娩・産褥期の助産技術を教授し、講義と演習で構成される。これらの両科目は同時期に開講している。「助産実習Ⅰ・Ⅱ」はいわゆる分娩介助実習（10例）であるが、その他に妊娠期の外来実習、ハイリスク

妊婦の助産過程展開（1例）、産褥期の母子の助産過程展開（分娩介助実習の対象者の中から継続事例3例程度）を行う。

2. 見学実習の方法

4月中旬に教員が見学実習の目的、方法等についてオリエンテーションを行った。以下にオリエンテーション内容を記す。

1) 見学実習の目的

分娩介助実習に先立ち、分娩期にある産婦へのケアについて介助する助産師の立場から、またケアの受け手である産婦の立場から、そして分娩という緊迫した臨床場面に身をおき観察実習することにより今後の助産実習に向けた学習を深める。

2) 方法

- ① 学生は希望する施設に交渉し、日時を決定し自主的に実施する（ただし講義のない土、日、月曜日とする）。
- ② 学生は完全な参加者としての立場をとり、分娩進行・経過、産婦の反応と助産師の働きかけ・両者の言動や行動を観察実習する。
- ③ 学生は毎回レポートを提出し、教員と個人面談にて指導を受ける。

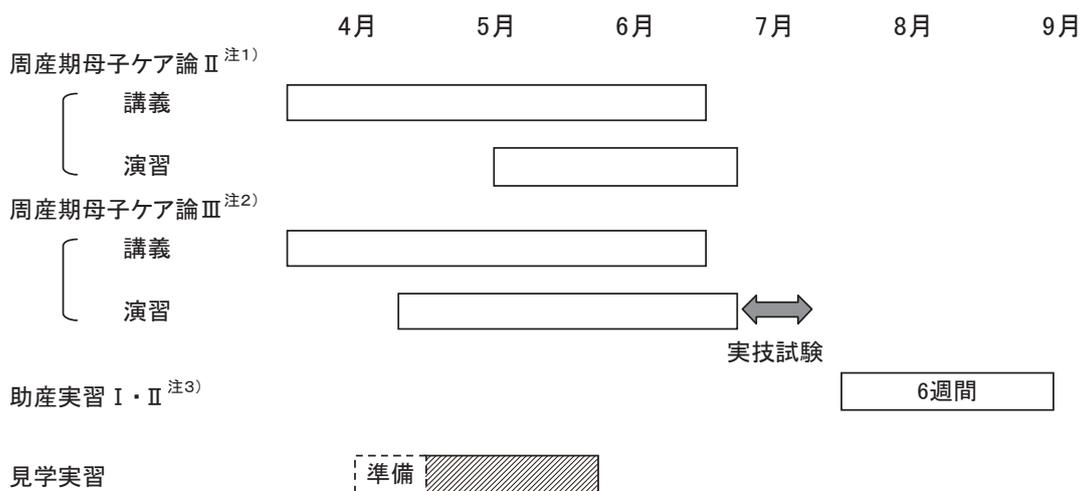
3) 時期

平成21年5月～7月の助産実習開始前（6月1週目迄に1例目を見学実習するのが望ましい）

4) 提出物

(1) レポート

- ① 産婦、助産師他、相互交流されている分娩室



注1) 妊娠・分娩・産褥・新生児期の助産診断について教授し、講義と演習で構成される。演習では助産過程の展開を行う。

注2) 分娩介助を含む妊娠・分娩・産褥・新生児期の助産技術を教授し、講義と演習で構成される。

注3) 妊娠期の外来実習、ハイリスク妊婦の助産過程展開、分娩介助実習10例、産褥期（母子）の助産過程展開（分娩介助実習の対象者の中から継続事例3例程度）を含む。

図1 平成21年度前期「周産期母子ケア論ⅡおよびⅢ」、「助産実習Ⅰ・Ⅱ」と見学実習の時期

での出産という現象全体から観察したケア内容、自らの考察、所感

- ② 助産師の立場から
- ③ 産婦の立場から

上記の3つの書式をweb上の掲示板に添付する。各自でファイルを保存し、原則パソコンで入力すること（やむを得ない場合は手書きでも可）。

(2) 提出日

見学のあった週の木曜日までに、メール添付で提出する。手書きの場合は直接提出する（コピーを1部とっておくこと）。

5) 面接日

レポート提出確認後に指定する。当日は、プリントアウトまたはコピーしたレポート1部を持参する。

6) 注意事項

- ① 交渉を開始し施設が決まり次第、学生は助産学領域の教員へ報告する。
- ② 学生は公文書が必要な場合は教員に連絡する。
- ③ 夜間呼び出しについては安全性・交通機関などに注意し、学生と施設側で話し合って夜間の見学実習実施に関する調整結果を助産学領域の教員へ報告する。
- ④ 施設側の許可があれば、1施設数名（2名程度）の学生が同時に実習してもよい。
- ⑤ 新しい発見を得る視点で観察実習する。
- ⑥ 学生として、看護者としてのマナーおよび倫理的に配慮した行動を守る。

3. 実習状況

オリエンテーション後、学生は希望する施設に学生自身で見学実習の目的を説明し、日時や見学方法を決定し、土日を含む学内講義がない日に見学実習を行った。学生が協力を依頼した施設は、休職中の職場や近隣または地元の産婦人科、助産所であった。学生からの依頼に、最初は施設の戸惑いもあり、大学への問い合わせもあったが、学生の熱意と見学実習の趣旨が理解され、結果的に8施設の協力を得た。うち6施設から希望があり公文書を発行した。見学実習期間は5月初旬～6月初旬で、8名全員が3回の見学実習を実施できた。

見学時期は学生の拘束時間と身体的負担を考慮し、原則として分娩第1期後半から第4期とした。1回の実習時間は最短2時間、最長12時間（院内での待機時間を含む）だった。見学後は提出されたレポートをもとに教員（筆頭著者）が学生の学びや気づきを把握し、学生の課題を明確化するために、各回、個人面談を行った。教員（筆頭著者）が提出さ

れたレポートにコメントを記載して返却した。

III. 研究方法

1. 研究対象者

本学の助産師教育課程1期生8名。年齢は22～28歳、全員が本学の既卒者で、臨床経験なしが3名、経験ありが5名（産科経験者は2名）であった。

2. データの収集方法・手順

見学実習によって助産実習のスムーズな導入が図れたかどうかを調べるためには、助産実習開始後初期の学生の反応をみるのが適していると考え、調査時期は助産実習Ⅰ・Ⅱが開始してから2週間後となる平成21年8月14日の帰校日とした。研究代表者が本研究の目的、方法、倫理的配慮等を明記した研究参加の依頼書をもとに対象者に説明し、「分娩見学自主実習レポート」の研究への使用と無記名式質問紙調査への回答を依頼した。

質問項目は、講義・演習に見学実習が役立ったかどうかとその理由、分娩介助実習に見学実習が役立っているかどうかとその理由、見学実習後のレポート記述と面談の学習効果の有無とその理由、見学実習における困難の有無とその内容、次年度も見学実習が継続する場合に教員に望むサポートであった。質問紙は郵送法で回収し、回答した質問紙の返送をもって同意が得られたものとみなした。本報では、質問紙調査の結果を報告し、考察する。

3. データの分析方法

選択式回答については単純統計を行った。自由記述については、学生自身が見学実習をどうとらえていたか、学生の視点からみた効果・今後の課題を明らかにするために質的帰納的に分析した。具体的には学生の記述内容を意味内容ごとに区切り、それらを類似性に着目して分類し、カテゴリー化した。

4. 倫理的配慮

本研究への参加と成績評価とは一切関係がないこと、参加を断っても学生が不利益を被ることはないことを依頼書に明記し、保証した。さらに回答者の特定を不可能にするため、質問紙は無記名、郵送による回収とした。質問紙を返送後、途中辞退をした場合はやむを得ないため、研究代表者に申し出てもらうが、その理由はあえて追求しないこととした。

また、分析データは施設できる場所に保管し、研究終了後はシュレッダーで破棄すること、得られた研究成果を公表する際には対象者名や個人的背景を特定しうる表現はしないことを約束した。

本研究は日本赤十字広島看護大学の研究倫理委員会において承認を受けた（承認番号0903）。

IV. 結果および考察

1. 見学実習の授業への効果

まず、見学実習を実施してよかったことがあったかを問うたところ、7名がよかったことが「あった」と回答した。次に、講義（おもに「周産期母子ケア論Ⅲ」について）、演習、実習、それぞれについて見学実習が役立ったかどうかを尋ねた。その結果を図2に示す。講義と学内演習については「役に立った」という回答が6名と多数で、学生自ら概ね効果を認識していたが、実習については「役に立たなかった」と「どちらともいえない」を合わせると5名となり、効果を認識している学生のほうが少なかった。

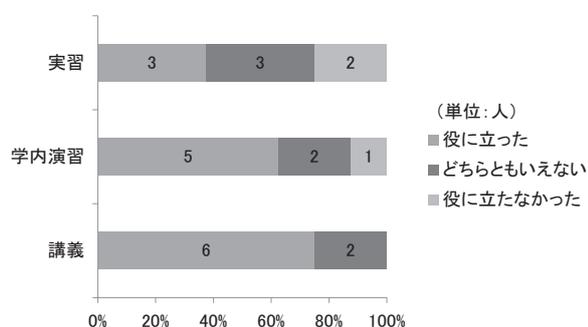


図2 授業に対する見学実習の効果

さらに、役に立った理由を表1-1に示す。講義については、「イメージがついた」6名、「授業内容が理解しやすかった」2名で、助産診断や技術に関する内容理解の促進に関するものが多かったほか、少数ではあるが「助産師としての姿勢」や「助産師の視点」を学ぶことにも役立っていた。演習については、「演習場面を理解しやすかった」5名、「演習場面での参考になった」2名であり、見学実習でとらえた場面を想起することにより演習での自他の役割や行動をイメージすることができ、スムーズに演習を行うことができたと考えられた。実習については、「施設による違いがあることを学ぶことができた」が2名、「流れや雰囲気をつかむことができた」が3名いたことから、実習初期の戸惑いや過緊張の軽減ができ、実習場への適応が比較的スムーズにできたのではないかと評価できた。

次に、役に立たなかった理由を表1-2に示す。演習については、先に現場で見学したがゆえに「見学施設と演習での（分娩介助）方法の違いに対する混乱」が3名に生じていた。また、実習については、「施設によって介助方法が違う」が4名、「分娩介助に必死で関連させる余裕がなかった」が2名いた。学生は分娩という現象全体、助産師として、産婦として、という3つの視点で見学し、その視点で記述

表1-1 見学実習が役に立った理由

授業	カテゴリー	記述数
講義	イメージがついた	6
	授業内容が理解しやすかった	2
	助産師としての姿勢を学ぶことができた	1
	助産師の視点を学べた	1
	精神的ケアの必要性を学ぶことができた	1
演習	演習内容を理解しやすかった	5
	演習場面での参考になった	2
	基本的根拠を考えることができた	1
実習	流れや雰囲気をつかめた	3
	施設による違いを学ぶことができた	2

(複数回答)

表1-2 見学実習が役に立たなかった理由

授業	カテゴリー	記述数
講義	分娩第1期の援助への理解不足	1
	施設による介助方法の違いに対する混乱	1
演習	見学施設と演習での方法の違いに対する混乱	3
実習	施設によって介助方法が違う	4
	分娩介助に必死で関連させる余裕がなかった	2

(複数回答)

したレポートをもとに教員との面談し、その際に次の見学時の課題についても確認した。しかし、1例ごとの見学実習での学びを大切にすることを目的で、面談にてその見学の振り返りをしなければ次回の見学ができないという原則にしていたため、幸い分娩が続くと電話による面談を余儀なくされたり、一人当たりの面談時間が十分取れなかったりしたこともあった。さらに、実際に分娩介助実習に入ると、学生は各実習施設に合わせた方法が必要となり、慣れない場に身を置きながら母子2つの生命の保全にかかわる実習を行う厳しい状況で、介助技術に直接的には関与しない学びを意識することが難しかったことが示唆された。しかし、せっかく見学実習で学んだ産婦としての視点、例えば分娩が切迫した際の産痛の表現や不安の内容、それに応じた産婦のニーズといったものを実習初期から活用できないことは残念である。これには最初の実習目的に関するオリエンテーションや、助産実習での担当教員との見学実習に関する情報共有の課題があり、今後の検討が必要である。

2. 見学実習に関する学習支援の効果

毎回の見学実習後のレポート、面談、それぞれについて効果があったかどうかを尋ねた結果を図3に示す。レポートについては「効果があった」という回答が5名で、過半数の学生が効果を認識していた

が、面談については「効果があった」と回答した3名に対して、「効果はなかった」が1名、「どちらともいえない」が4名おり、学生の視点による学習効果の判断が難しい様子が伺えた。

さらに、効果があった理由を表2-1に示す。レポートについては、「振り返りができた」が4名、「意識して見学できた」が3名、「自己の思考や学びを整理できた」が2名いたことから、学生は3回の貴重な見学を毎回、目的意識を持って行い、見学内容や自己の気づき・学びをレポートとして記述することで振り返ることができていたことが分かった。一方、面談については「効果があった」と明確に認識している者は3名であったが、「どちらともいえない」と回答した4名にもポジティブな理由記載が

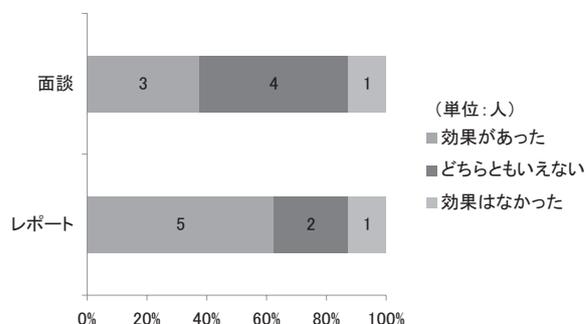


図3 見学実習に関する学習支援の効果

表2-1 見学実習に対する学習支援の効果があった理由

学習支援	カテゴリー	記述数
レポート	振り返りができた	4
	意識して見学できた	3
	自己の思考や学びを整理できた	2
	客観的にとらえることができた	1
面談	情報の整理ができた	2
	新たな気づきがあった	2
	次回見学時の課題ができた	2
	疑問の解決ができた	1

(複数回答)

表2-2 見学実習に対する学習支援の効果なかった理由

学習支援	カテゴリー	記述数
レポート	変化のない記述内容	1
	3つの視点を捉えることの難しさ	1
面談	面談後、次の分娩見学となるやり辛さがあった	2
	疑問の解決ができなかった	1
	新たな気づきはなかった	1
	学習効果が深まるほどではなかった	1

(複数回答)

多かった。学生は助産学の学習初期であるために見聞した内容をその場でとらえることは難しく、教員とレポートをもとに面談することにより、「情報の整理ができ(た)」、「新たな気づきがあった」と考えられた。その結果、次回見学時の課題も明確になり、より効果的な見学実習につながったと推察される。このようにレポートと面談という2つの学習支援によって学生の振り返りが促進され、それによって個々の学びが深まり、前述した授業への効果が高まったと推察された。したがって、この点は実習目的を達成できたと考ええる。とくに分娩見学実習の初期には、臨地実習指導者が学生に「振り返り」を生かして経験を積み重ねることを期待していることから(菱沼, 2008)、振り返りの技術が身につくことは今後の学習にとって大きな強みであると考ええる。

次に、効果がなかった理由を表2-2に示す。レポートについては出産という現象全体、助産師、そして産婦という3つの視点で記述することが難しかったという意見が2名あった。面談については、前述したように学生も教員も面談の日程調整に苦労し、場合によっては電話で面談を行うなど努力したが、それでも十分な学習効果が得られなかった場合もあったと考えられた。

3. 見学実習の継続と課題

見学実習で困ったことがあったかどうかについて尋ねたところ、全員が「あった」と回答した。その

理由を表3に示す。

全員が「学生が直接施設に依頼するときに嫌な思いをした」という理由を挙げていた。見学実習は自主性を育てることも意図しており、また1期生は5名が臨床経験者で施設の協力も得られやすいと思われたため、見学実習の施設選択、依頼から学生に行ってもらい、必要時教員はサポートした。その過程でも学生から戸惑いの声は多かったが、今回の調査でいかに臨床経験者であっても実習依頼の過程が想像以上に大変だったかが明らかになった。見学施設が分散しすぎたために、「実習を許可していた施設にお断りをせざるをえず、辛かった」こともあり、学生には心的負担が大きかったことが推察された。また、1名ではあったが「土日に待機となり休みが十分にとれなかった」とあった。朝から学生が院内待機をし、分娩がある場合に呼び出してもらうという形態をとった施設もあったが、自宅待機の場合でもいつ呼び出しの電話がなるかと緊張していることには変わりはなく、ほとんどの学生がこうした状況であったと推察される。

次に、もし次年度も見学実習を継続するとしたら、後輩のために教員にどのようなサポートを望むかを自由記載で尋ねた。その結果を表4に示す。

前述の困った理由に関連して、「実習環境の整備」が5名、「待機方法・時間、期間、例数の再検討」が4名と多く見られた。「実習環境の整備」の具体的内容をみると、学生は施設に学生自ら依頼するこ

表3 見学実習で困った理由

カテゴリー	記述数
学生が直接施設に依頼をするときに嫌な思いをした	8
施設側に見学実習の目的や方法が周知されていなかった	5
一度受け入れてもらった病院を断るときに嫌な思いをした	4
指導者の言動に傷ついた	1
土日に待機となり休みが十分にとれなかった	1

(複数回答)

表4 見学実習に際して教員に望むサポート

カテゴリー	記述数
実習環境の整備	5
待機方法・時間、期間、例数の再検討	4
実習目的の明確化	2
見学施設の選定基準の明示	2
実習施設の分娩見学ができるようにしてほしい	1
成績評価の対象として欲しい	1

(複数回答)

とは大切であると感じているが、実習目的や方法について施設に事前連絡をしてほしい、施設のリストがあるとよいという事前準備に関する希望が複数あった。待機方法・時間、期間、例数については、学習初期からあまり緊張状態や身体的負担が大きければ、逆にモチベーションを低下させることが危惧されるため、検討が必要である。

V. 結 論

助産学の学習初期に自主的に分娩見学を行うことによって学習のレディネスとモチベーションを高め、助産実習のスムーズな導入を図るために、「分娩見学自主実習」を実施した。この見学実習の効果と今後の課題を学生の視点から明らかにし、より効果的な教育方法を検討するために、本学の助産師教育課程1期生8名に無記名式質問紙調査を実施し、以下の知見を得た。

1. 講義や演習では「役に立った」という回答が多く、見学実習によって助産診断や技術に関する講義内容の理解や、演習での自他の役割や行動のイメージが促進されていた。
2. 分娩介助実習では「役に立たなかった」という回答が多く、理由としては見学した施設と実際の実習施設が異なり、分娩介助手順や物品が異なっていたことがあがった。
3. 見学実習における見学内容や自己の気づき・学びをレポート記述することは多くの学生が学習効果を認識していたが、見学後の面談は日程調整が難しかったこともあり、学生による評価は分かれた。
4. 学生8名のうち5名が臨床経験者であり、見学実習を自主的に行う意義は理解していた。しかし、学生自ら施設へ実習依頼する心的負担は重く、見学実習の継続にあたって教員には「実習環境の整備」、「待機方法・時間、期間、例数の再検討」が望まれていた。

VI. おわりに

講義・演習に関する見学実習の目的はほぼ達せられたと考える。今後の課題として、分娩介助実習のスムーズな導入に関して学生自身による効果の認識は低く、実習目的に関するオリエンテーションや助産実習の担当教員との見学実習に関する情報共有のほか、見学実習の事前準備や面談の設定など方法上

の課題が残された。

しかし、教員の視点からは、分娩という緊迫した場面での身の置き方や対象者とのコミュニケーションのとり方はスムーズであり、一定の効果があつたと考える。また、10月の大学祭での思春期を対象とした集団健康教育においては、企画の段階で学生自ら近隣の小中学校を自主的に訪問し、小中学校の教員から性教育に関する現状を聞いて主体的に教育計画や広報に活かすなど、学生の成長には目を見張るものがあり、見学実習での施設との交渉経験が役立ったと思われた。今後はレポート内容から見学実習における学生個々の学びと成長を分析し、見学実習の教育効果と課題についてさらに検討することが必要である。

謝 辞

本学の助産師教育課程の設置初年度にあたり、見学実習の施設開拓に尽力され、後輩のために貴重な意見をくださった1期生の皆様、学生の熱意をご理解いただき、見学実習を受け入れご指導いただきました施設の皆様に深謝いたします。また、見学実習の着想とご助言をいただきました新道幸恵学長に感謝いたします。

文 献

- 菱沼由梨 (2008). 臨床指導者が分娩介助初期の学生に期待する学びの構造. 日本助産学会誌, 22(2), 146-157.
- 岩崎和代, 松永佳子, 中北充子他 (2008). 本学における助産師教育の現状と課題 - 4年制大学移行後, 2年間の周産期実習の現状から -. 東邦大学医学部看護学科紀要, 21, 34-43.
- 三浦陽子他 (2008). 鹿児島大学保健学科助産師教育課程における分娩介助実習のまとめ - 平成14年度からの分娩介助回数の推移と実習時間 -. 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 18, 37-43.
- 村山稜子, 渡邊典子 (2002). 助産婦教育における分娩介助実習の検討 (第2報) - 分娩介助実習での学生のストレス反応の測定 -. 日本看護科学会誌, 22(1), 44-52.
- 樽原洋子, 羽根田公江, 山崎トヨ (2007). 助産師教育における分娩介助例数の確保に向けて - 実習施設の状況と学生の分娩介助例数から考察する -. 埼玉医科大学短期大学紀要, 18, 37-49.

An effective method for early midwifery education: The effects of observing midwifery practice during a delivery

**Naomi YOKOTE Mayumi TAKEDA Hiroko KUSUNOKI
Masami INOUE Shigemi YOSHINAGA***

Abstract:

To enhance readiness and motivation to learn, and then to introduce clinical midwifery practice smoothly, our midwifery course introduced a session of “voluntary observation of midwifery during a delivery” for students in the early stage of midwifery training. We examined the effectiveness of this from the students’ perspective, and related issues, using an anonymous questionnaire.

The results showed that the midwifery students found that observing a delivery was helpful because it promoted their understanding of lectures and visualization of midwifery exercises. However, few found it helpful in terms of clinical midwifery practice. Many students recognized that writing a report of what happened at the delivery was very useful for personal reflection. Nevertheless, they also found it difficult to make an appointment for an interview about the session with their teacher and so the evaluation was divided on this point.

In conclusion, the aims of the lecture and midwifery exercise were almost reached, although few midwifery students found that observing a delivery smoothed the introduction to clinical midwifery practice. Therefore, the next challenge is to clarify the methodology involved, including the observations of midwifery practice and the interview with a teacher.

Keywords:

Delivery, midwifery students, observing midwifery practice

* Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing